

充実度・満足度は大きく異なる。事実、会社ごと突っ走る高速道路を一人静かに降り、自分ならではの「けもの道」を歩み始める人も多い。

では、いったい、どこを目指して走ればいいのか。

暗記一辺倒、予め答えがあるという試験問題に慣れ、どこからか模範解答を探してくることに慣れきった私たちにとって、これは実は、悩ましい。グーグルの検索結果に人生の答えはない。しかし、ここでもドラッカーは「何によって憶えられたいか」を問え、とヒントをくれる。この問いこそ、今の世の中に生きるすべての人にとって必要なものではないだろうか。若者はもちろん、表面上豊かなこの時代に生きるものすべてに、常に点検すべき重要な問いのように思う。

ドラッカー本を携えながら

「目の前の石臼に向かいながらも、丘の上を見よ。」ドラッカーはバランスを重視する。多様性を好む。それぞれの自分らしさにエールを送る。この有能な整体師をメンターに持てるわれわれは幸せだ。施術時間は人それぞれ。費用はわずか。整体後、晴れやかになる。視界が開ける。進むべき道筋が浮かび上がっている。

だからドラッカー本は手放せない。休暇中の旅先にも、マラソン大会の会場にも、トイレの中にもドラッカー本を携える。線を引き、意味を考え道を見出す。そして、今日も我が姿勢を一つ正す。

【略歴】1965年生まれ。高崎経済大学卒業後、広告会社勤務の後独立。広告編集工房・はなまるメッセージ代表、マーケティング・コーディネーター。経専学園非常勤講師。

時空を超えて語りかけるもの

ブルース・ローゼンSTEIN

(『USAトゥデイ』)

来年はドラッカー生誕100年にあたる。なぜ世界中これほどまでの人々に支持されるのか、その要因を落ち着いて考えてみるべきときである。

2005年に没して以降、今なお彼に関する書物は刊行され続けている。書物だけではない。新聞、雑誌、ネット上でも頻繁に引用され続けている。青年期に書かれた作品も今なお、新刊書とともにふつうに書店に並べられている。おそらくともに並ぶ新刊書の多くは彼の作品の寿命にはるか及ばないだろう。カリフォルニア州クレアモントのドラッカー・インスティテュートとドラッカー・スクールもまた、世界中のドラッカー研究団体同様に活発に動き続けている。

時代、国境、世代を越えて読まれ続けるのはなぜなのか。

その一端は、いかなる世代にも、いかなる言語でも語りかける時空を超えたメッセージに見出すことができる。多くは彼をマネジメント思想家と見るけれども、それ以外のじつに多岐にわたるテーマを彼は書いてきた。マネジメントのみに限定するには、彼の思想はあまりに重要なものを多く含んでいる。

世界中に彼の信奉者がいる理由の一つは、彼自身が本来国際的な相貌を有していたからである。それに、他者にもグローバルなものに適応するよう推奨してやまなかった。オーストリアに出生し、ドイツの大学に進学した。後にイギリスに出奔し1937年までそこで暮らし、以降は没するまでアメリカの住人となった。彼はこんな世界遍歴が骨に沁み渡っていたし、全世界の課題について書き続けたのもそのためである。

知識や知識労働者の意味を見出したのも彼だった。知識労働者の語彙は50年代後半の彼の造語であった。グーグルのような検索エンジンが開発されるはるか前、パソコンすら存在しない時代であった。

知識の本質とは時空を超越するところにある。人間は知識に飽くということがない。常に必要性の高い情報の探索に追い立てられている。いくら情報探索のツールがスピーディかつ精緻になっても、そこから湧きでる問題は複雑かつ混沌の度合いを高めていく。改善の手を休めることは永遠にできないのである。

人間に対するまなざしは、だてや酔狂によるものではなかった。国家にとら

われたものでもなかった。彼の助言はマネジャー云々など関係なく、あらゆる人々に知識労働者としての心構えを説いた。他方、マネジャーに対しては、人をコストではなく資源として扱うよう念を押した。

こんなコストや利益の概念一つとっても、人々が義務感からでなく喜びとしてドラッカーを読む理由の一端が伺える。やや茶目っ気があって、諧謔に満ちているのだ。プロフィット・センターは実際に財布からお金を払ってくれるお客さん以外にないんだよといった発言などが典型だ。

本当に大事な問題は常に組織の中ではなく、外で起こっているとする独自のものの見方に関係している。ネットをはじめとする情報探索ツールによって外の世界の様子が見えるようになった。彼の人生ではほとんど存在しないも同然だった。だが、原則はまったく変わらない。内部ばかりに一生懸命だと、いつしかどこからかまったく想像だにできなかったような誰かがやってきて、その変化が見えなくなりますよということだ。

こんな外の世界で時々刻々起こることについて、ありえない解釈を示し続けた(圧巻は2001年に特別論文として世に出た19頁にわたる『エコノミスト』論文だ)。彼は知人、友人、学生、仕事仲間など世界中に恐るべきネットワークを持ち、彼らから来る本や論文の資料にもきちんと目を通していった。

彼はこんなふうToWorld中で起こる問題を観察していた。その生涯飽くことなき真摯な姿勢で、いかなる言語であろうと食欲に情報収集した。ただし、教わるだけでは足りないことは百も承知だった。人は教わるだけではいけない、教えなければいけないのだ。だからといって大学の先生になれというわけではない。確かに彼自身はドラッカー・スクールで長く教えていたし、その前にはニューヨーク大学その他で教鞭をとってきた。だが、彼は自らの仕事や専門領域の中で人に教えるよう助言した。教える人の体験を別の誰かが学ぶばかりではない。むしろ教えることで、教える当の本人のプロとしての技能が向上する。あることを人に教えることで、それをきちんと自らが理解せざるをえなくなるからである。

個の重視とは、機能する社会を創造せよとの主張と1セットであった。彼は第二次大戦前のドイツで、人がどれほど残忍になれるかを嫌というほど見てきた。

この経験から紡ぎ出されたのが、1939年の処女作『経済人の終わり』であった。ここから多年にわたる執筆活動は開始されたのである。そして、2002年には社会論の集大成たる『ファンクショニング・ソサエティ (A Functioning Society: Selections from Sixty-Five Years of Writing on Community, Society, and Polity)』が意義深く刊行されることとなった。

彼が指摘した現実のほかにもある。知識労働者は仕事のみでなく、社会活動においても自らの時間を使うことである。すなわち、週に何時間でもいいから非営利組織で活動するということである。もっぱらマネジメントのコンサル

タント、書き手として知られる彼にとって、これは別に矛盾ではない。彼自身も非営利組織で活動してきた(ニューヨークに本拠を置く1990年創設のリーダー・トゥー・リーダー財団の名誉会長も務めた)。

このように時空を超越する彼の示したことは、自分にも他人にも、問いを持つてはじめられるのが常であった。コンサルティングに際しては、まず相手企業について詳細に情報を仕入れ、次に内部に入っていってじっと人々の話すことに耳を傾ける。そして、いかなる未来を選ぶかについて、問いを投げかけることによっていた。

彼は自らが仕事において何をうまく成し遂げたか、そして、何を成し遂げることができなかったかを自問した。とくに長くトップの地位にある人や、定年退職後の人々にとってこのような問いは是非ともなされる必要がある。

彼には真に意味あるつながりを感知するアンテナがあった。それらは現代を生きるわれわれのみならず、未来世代にとっても、修得すべきスキルである。なぜならいかに時間が過ぎても、人は情報や知識の伝達を学び、それとともに動かなければならないからである。そのとき、彼の言葉や人生で示されるものが生きてくる。それらは印刷物、ネット、いまだ見ぬ情報媒体を通して、時間と空間を超えて記憶されるに違いない。

井坂康志記

【略歴】『USAトゥデイ』(発行部数で米国最大の新聞)の文献調査員。図書館情報学について、カトリック大学で教鞭をとる。ビジネスやマネジメントについていくつかの著書を持ち、*Living in More Than One World: Transforming Your Life the Peter Drucker Way*を近日刊行予定。